

催眠パイズリ

男の騎乗位

堕ちた幼馴染み
をケガスワケ

回止め勝負

誤認筆おるし

目次

第一話	催眠・パイズリ・筆下ろし	3
第二話	口止めと雪解け	36
ご挨拶		66

主な登場人物

山野辺栄（やまのべ さかえ） 十九歳の大学生。涼華とは幼馴染みの間柄。

堺涼華（さかい りょうか） 十九歳の大学生。一彦に溺れ、性格が変わっている。

一彦（かずひこ） 涼華を恋人にした大学生。

山野辺和臣（やまのべ かずおみ） 天才博士。甥の栄に催眠マシンを与える。

第一話 催眠・パイズリ・筆下ろし

彼女の姿を認めた時、やまのへさかえ山野辺栄は目を丸くして硬直した。

幼馴染みの堺涼華さかいりょうかに呼び出され、大学近くの喫茶店に入ったのは午後一時五十分きっかり。学生で混む時間は過ぎていたので、客は数えるほどしかない。

すれ違ったウエートレスに一番安いコーヒーを頼んだ栄は、壁に面した一番奥の席に座った。

「来てくれてありがとう」

「あ、ああ……そりゃ、来てくれと言われて、行くと言ったからな。来るだろ普通」

よく知った間柄だということにどもってしまふほど、しっとり微笑んだ幼馴染みは魅力的だった。

心音が高鳴り、頬が火照ってくる。

（こうして会うのは一ヶ月ぶりだったか？……少し見ない間に随分変わったな）

家が近く、小学校から今の大学に至るまでずっと近くにいた幼馴染みは、まるでモデルかアイドルのような雰囲気醸している。

冷涼で端正な細面にファンデーションをつけ、ぽってりした唇には桜色のルージュ。

艶やかな長髪は目に優しい金色に染まり、滝のように流れている。

きめ細かい雪肌の肩と鎖骨を剥き出しにするピッチリした深紅の極薄ウェアは、並外れ



たバストの輪郭を浮き上がらせていた。

谷間の端にかかる鐘型トップのネックレスを着けているので、胸元に目がいき易い。まるで、自分の胸を誇示し、見ろと言わんばかりのファッションだった。

(昔から顔もスタイルもいい女だったけど、こんな派手な格好をする奴じゃなかったのに) 過日の涼華は、無意味に着飾ることを避けていたはずだ。

不潔を嫌い、身なりに気を遣い、たまには年齢相応のしゃれっ気を出すこともあったものの、ファッションに金をかけるよりは貯金して将来に備えるという女だった。

(男ができたか?)

久しぶりに顔を合わせた幼馴染みと他愛ない話をしながら、失礼にならない程度にじっくり観察し、栄は結論する。

その時だった。

「あ、こっちこっち」

やにわに立ち上がった幼馴染みは、見たことのない明るい顔をし、入り口の鈴を鳴らした男に手を振った。

「ごめん、待った?」

「ううん、さっき来たところだから」

栄を完全に無視して涼華の隣に座ったのは、アイドルのような男だった。

歳は自分たちと変わらないだろう。二十歳前後か。

涼華と同じ色の長髪はサラサラで、甘いマスクによく合っていた。女好きしそうな細い身体をしており、服やアクセサリーのセンスもいい。整った外見は澄んだ声と相乗効果を起こし、清潔感を強く印象づける。

十人並みの顔、ディスカウントショップの安服を着ている栄とは月とスツポンド。(で、こいつがその男か)

ポーカーフェイスでうんざりしながら、栄は冷めたコーヒーを啜る。砂糖をかなり入れたはずだが、味がしなかった。

「栄、紹介するね。この人は一彦さんかずひこと言って、ゼミの先輩なの」

「さんはいららないよ涼華。僕らはそんな仲じゃないだろ?」

一彦はやらら白い歯をこぼして笑った。

涼華の頬がトマトのように紅潮する。湯気が上がったのが見えた気がした。

「はい……んとね、栄。こちらは一彦さん……一彦と言って、ゼミの先輩なの」

ほつつと熱い溜め息をつく。

「初めまして栄くん。初対面の君にいきなりこんなことを言うのは失礼だと重々承知しているのだけれど、涼華の幼馴染みの君に黙っているのは筋違いだからね……どうか、失礼は許してほしい」

栄に向かって穏やかに微笑み、一彦は続ける。

「実は、僕と涼華は交際しているんだ。もう一ヶ月になる。深く、付き合わせてもらって

いるよ」

一彦は笑みを深くした。

「それは……………おめでとさんで……………それで？」

よくも悪くもない生来の地声を出したつもりだったが、老人のようなしゃがれ声だった。栄はコーヒーで喉を潤し、咳払いを一度する。

普段の声で失礼、と言って先を促した。

そんな栄の様子を薄く笑いながら見ていた一彦は口を開く。

「いや、それだけだよ。このことを伝えるために涼華の協力を得て、この場を設けさせてもらったというわけさ」

一彦は立ち上がった。続いた涼華は、ほっそりした腕を、背の高い恋人の腕に愛しそつに巻き付けた。

「それじゃ、時間をとらせてすまなかったね……………君にも涼華のように素敵な彼女ができることを願っているよ」

「バイバイ、栄」

幼馴染みの恋人は栄の伝票を拾い上げると、涼華と一緒に出て行った。彼女は楽しそうな笑顔で一彦ばかりを見ている。他のことは見えなくなっている風に思えた。実際、見えていないのだろうか。

ふたりの姿が、道路に面した窓から完全に見えなくなった後、栄がぼそりと呟く。

「ハアツ？」

胸にポツカリ穴が空き、寒々しい木枯らしが吹き抜けているようだった。

それは僅かな間で、すぐに心の底がふつつつと煮え滾ってくる。

寂寥感の後に訪れたのは怒りだった。

栄と涼華は、幼馴染みと言っても深い関係ではないし、男女の関係になったことなど無論ない。

実は、僕と涼華は交際しているんだ。もう一ヶ月になる。深く、付き合わせてもらってるよ。

仲のいい異性の友達という程度で、交際報告を受ける立場には断じてない。

君にも涼華のように素敵な彼女ができることを願っているよ。

年齢イコール彼女いない歴であることなど吹聴したことはない。知っているとしたら涼華だけだろう。彼女が教えたに違いない。

涼華のように素敵な……。

涼華以外の女を探せ、つまり、涼華は僕の女だ、と言っ主張が。

一彦は爽やかに微笑んでいたが、栄だけに見えていた瞳はドス黒い感情に満ちていた。

ひとり者への侮蔑。

この女は自分のものだと見せびらかす顯示欲。

仲のいい女を奪ったという優越感。

深く、付き合わせてもらってるよ。

ああ、狙った女の身も心も征服してやったぜ！ という牡の優越感と言った方が正確か。
「ムカツク」

とは言え、自分がどうこうするものでもない。

あの先輩は見た目はいいが性格は怪しい。腐れ縁のよしみで警告してやろうと思わないでもないものの、今の涼華に言っても聞き入れはしないだろう。

恋する乙女の見本のような様子が脳裏を掠める。

たった一ヶ月で、それまでのスタイルを一変させるほどのめりこんでいるのなら、仲のいい幼馴染みごとときにはどうすることもできない。

「うっ……うっ……グスッ……」

嘆息して立ち上がろうとした時、後ろから嗚咽が聞こえてきた。

訝しく思って聞いていると、すぐに大きな泣き声になった。

「うわーん、うわーん、さかええ、なんてかわいそうなんだあ」

ぎょっとして振り向くと、後ろの席に初老の男が一人いた。

ごま塩頭でカイズル髭を生やした小柄な男性。栄がよく知る人物だ。

「お、叔父さん！」
やまのべかずおみ

父の兄の山野辺和臣。栄たちが通う大学の工学部の教授で、博士号を持っていた。

ちよっと変わったところはあがあるがすこぶる優秀で、自宅には賞状や盾が数え切れない位

転がっている。

「ちよ、ちよっと叔父さん、泣かないでくださいよ、お店の迷惑です。ほら、ハンカチで涙を拭いて」

栄は、ポケットからハンカチを取りだし、何とか叔父を宥めようとした。

少ない客は何事かと見ているし、ウエートレスが小走りで向かってきている。

泣きやませるのに必死で、先ほどまでの悪感情は綺麗に消えていた。

頭を下げてウエートレスを下がらせしていると、叔父はようやく落ち着いてきた。

「えぐっ……すまん………あんまりお前が不憫だったんでついな……グズツ……」

話を聞くと、叔父はずっとこの席で遅い昼食をとっていたらしい。

父の兄は、実の親よりも栄のことを可愛がってくれている。先ほどのやりとりの意味を同じ風に理解した叔父は心底同情し、自分のために泣いてくれたようだった。

「悔しかろう……辛かろう………よし、お前にこれをやる。これで報復するがいい」

「報復って………なんですかこれ？」

足下のポストンバックから取り出された物は、玩具の光線銃に見えた。

百円ショップやスーパーの玩具売場などに並んでいても違和感のない安っぽさだが、妙な違いがある。

銃口に半球型の鏡がついており、銃身の上部にもでっぴりのように遠視スコープがついていた。

鏡の先っぽを覗いてみると、三面鏡のように自分の顔が幾つも写る。

「これぞ催眠導入マシン、『いいなりにナール』じゃ」

自信たっぷりなふんぞり返った叔父の髭の先が、キラリと光った気がした。

「へいっ」

パチンッ!

栄と和臣の満足げなハイタッチが、部屋の中に響きわたった。

一彦らとの一件の翌日。

今度は栄が涼華を呼び出し、叔父の奇天烈なマシンを使った。

スコープを覗いて狙いを定め、先端の鏡面に相手の顔を映す。トリガーを引いて作動

させれば、鏡面が七色に明滅して相手を催眠状態に落とす。機械の虜になった者は、使用者の言葉に馬鹿のように従うと言っ寸法だ。

学生で満員御礼の店で行うには酷く勇気のいることであつたし、成功するや否や得意顔でマシンの蘊蓄を垂れ始めた叔父を止め、怪訝な視線を送ってきた客たちを誤魔化すのも苦勞をしたが、兎にも角にも望んだ通り、幼馴染みを自室に連れ込むことに成功した。

昨日と同じく、セクシーな服装をしている涼華は無言で佇んでいる。

恋する女の瞳はどこか虚ろで、ビー玉のように生気がない。

身じろぎ一つせず、ただ胸元を上下動させているだけの様子は、無機的なマネキンを彷彿

佛とさせた。

「ところで叔父さん。『いいなりにナール』の効果持続時間はどの位なんですか？」

「うむ。効き目には個人差があるので確実なことは言えませんが、一日弱は続くと思っ
ていい。もつとも、効果が切れる前や切れた時に再びマシンを使えば、持続時間は延長する」

叔父は鷹揚に頷いた。自分が作った物に絶対の自信を持っている風だ。

安心した栄は衣類を脱ぎ捨て、ベッドの端に腰掛けた。

「では、早速始めようと思います……叔父さんは本当にいいのですか？」

「ああ。涼華ちゃんはお前の獲物。お前だけが好きにするべきだ。わしは、お前が報復を果たして溜飲を下げてくれればそれでいいのじゃよ」

好々爺の笑顔を浮かべていた叔父はそこで言葉を切った。

神妙な顔になって栄の瞳をじっと見詰め、こつ付け加える。

「だが、くれぐれもあのことだけは忘れずにな」

「わかってますよ叔父さん……ご協力に感謝します」

心を込めて謝辞を述べると、叔父は満ち足りた風に微笑んだ。

別れの挨拶を済ませた叔父は、名残惜しそうに部屋から出ていった。

「報復か……それじゃ、報復を始めようかな」

昨日、喫茶店でのろけていた涼華は、物騒な言葉を聞いても何の反応も示さない。

栄は咳払いを一つしてから、おもむろに命令した。

「涼華、服を脱いで裸になるんだ。でも、ネックレスと髪の毛のリボンはそのままでいい」
頷きも返事もしないで即座に服を脱いでいく涼華。

自分の部屋で着替えをしているかのような、色気のない脱ぎ方だった。
肌に密着する薄い上着を脱ぎ、股間よりも少し低いだけのタイトスカートを外す。

喫茶店でめかしこんだ姿を見た時からそうでないかと思っていたが、どうやら栄と会った後には彼氏としっぽりしけこむ予定だったらしい。

こぼれんばかりの双乳と、ムチムチした股間には、揃いのランジェリーをつけていた。
深紅の上着と同じ、情熱的なレースの下着だ。

一彦はそういう趣味らしい。大人っぽい好みであり、いかにも自分に自信のある男が好きそうなランジェリーである。

今の涼華の容姿にも同じことが言えるが、こちらの場合は他人に見せ付ける意図もあるだろう。垂涎の的な女を隣に侍らせることで、牡の優越感に浸るのだ。

「これが、アイツの手垢がついた涼華のカラダか」
栄は、脂ぎった目で幼馴染みの裸体を視姦する。

付き合いは長いが、裸を見せ合ったのは小学校低学年まで。女として成熟したカラダを見るのはこれが初めてだった。

乳首も秘部も丸出しにした涼華は、足を肩幅に開いて両手を脇に置いている。
恋人でない男に見られているにも関わらず無表情を通していた。操り人形と化している

今、命令がなければ、ずっとその顔のままているのだろう。

「いいカラダしてるぜ。これをモノにしたなら、見せびらかしたくなるのも無理ないかもな。俺はやんないけど……………涼華、スリーサイズを言え。オツパイのカップもだ」

「上から、百二のH、六十三、九十八……………」

抑揚のない声で涼華が答える。

本来他人になど知られたくないシークレットだろうに、スラスラと言い切った。

百二センチHカップの豊胸は、欧米女優に見られるタイプの乳房で、日本人離れた美巨乳だった。

鎖骨の下から突端までがほぼ垂直。横乳は腋の下から丸くはみ出ている。屋根のように突き出た下乳は、前にも横にも魅力的な曲線を描いている。要するに、寺などにある鐘を横倒しした形だ。

アーモンド上に盛り上がった腹部は贅肉がまったくなく、丸みの強い腰と尻は逆に肉付き豊富だった。尻たぶは桃のようにふっくらしていて、見るからに柔らかい。前屈みになってスカートやショーツを脱いでいた時は、フルンフルンと肉の波紋を広げていた。

「こんな立派なオツパイを好きにできるのなら、やっぱりパイズリだよな。涼華、次は俺にパイズリするんだ」

巨乳の彼女にさせない男はいないだろうと思いつながら、栄は命じた。

万一、涼華がわからなくとも、それなら教える楽しみがあるというものだ。

美巨乳の彼女にパイズリもさせない情けない男に代わって仕込むというのは、牡の優越感をくすぐられる。

どうなるかと見ていたら、涼華は栄の足下に跪いた。どうやら知っていたらしい。

「ん……………ん……………」

乳首の下を掴んで両乳房を開く涼華。膝で摺り足をして、身を乗り出してくる。見事な裸体を見て勃起していたペニスの裏筋を胸板と密着させてから、乳房を閉じる。

「おおッ！ これはいい、想像以上だ！」

全周囲から乳肌が押し寄せてくる。

温かな柔肉の壁は、ズッシリした重量感を伴いながら、そそり立つ勃起ペニスに殺到してくる。

敏感な亀頭の下半分にも白い乳肌吸い付いてきて、ペニスに快感電流が走った。

「ンツ……………ふうンツ……………」

無表情のまま鼻を鳴らす涼華。相手が誰ともわからないまま、機械的に命令に従っているだけなので、情感が籠もっているわけがないのだが、酷く色っぽい。

官能的に息を継ぐ涼華は、金髪のショートポニーテールを揺らしながら、乳房を使ってペニスを扱く。

左右から肉棒を圧迫し、そのまま上に搾り上げるといっやり方だった。

ばらけさせた十指の間からは、ムニユリと乳肌が嵌みだしている。なにしろ百センチ

のHカップ。男の手でも掴みきれない豊胸を、女の手がカバーしきれるはずがない。砂糖水に似た仄甘い香りを放つ乳房は、外側から潰されては縦長に伸びる。肉棒を上にあく時には上方方向に伸び上がり、日常ではまず見れない淫らな姿態を見せてくれた。

「ああ、気持ちい……」

命令通りにパイズリをする幼馴染みを見下ろしながら、栄は満足げな溜め息をつく。搾られる風に豊胸で刺激されていると、ひりつくような快感がペニス全体に染み込んでくる。

温かい乳房に包まれている肉棒が、どんどん体温を上げているのも堪らない。

「はあっ……はああ……はうああ……」

パイズリの運動のせいかわ、ペニスの熱が伝播しているのか、それともその両方か。涼華が漏らす吐息の熱も上がっている。

ペニスを扱く白い乳房も薄くピンク色になってきて、指の間から覗く乳輪の横には薄く青筋が浮いていた。

「どうであれ、興奮してるんだな涼華。意識をとられて、その元凶の……恋人でもない俺のチンポを無理矢理パイズリさせられてるのに、スケベに反応してるんだ」

涼華からの返事はないが、どうでもよかった。

目の前の光景と、肉棒の中に満ちるパイズリの快感が、他の男の女を奪っている実感を強めてくれる。

牡の心をくすぐる状況は、ペニスをますます猛らせて、押し寄せてくる乳房を外側にぐいぐい押し返す。

「折角だ。こんなチャンスはもうないかも知れないから、ローションも使っておくか」
ベッドの上に置いていたローションを取ると、いったん涼華を中止させた。
ホットケーキの夕ネを垂らす風に、亀頭の真上から高粘度の透明液体を注ぐ。
ひんやりして重い粘液は、亀頭をぐしょ濡れにしながら竿に沿って下りていく。乳房とペニスが密着しているので、胸の谷間の入り口にせき止められた分もあつたが、多くは乳肌との微細な隙間に入り込んだ。

「準備完了っ。いいぞ涼華、パイズリ再開だ」

涼華は赤く照り光る亀頭と、飴色を帯びた竿を包む自分の胸に視線を戻し、乳房を使い始めた。

又チュ……………ニチュ……………ヌルルル、又チュ又チュ、グチュウツ……………。
「くううツ！ きくな、コレえ……………」

石鹸やソープの類よりもずっとヌルヌルする粘液は、乳房の摩擦をヌメらかにしている。刺激はひたすら丸っこい。先ほどまでの刺激も、自分の手で手淫するよりも遥かに柔らかかったのだが、さらにまるやかになっている。このままペニスが溶けるのではないかと思ってしまう。

蕩けそうな刺激は、ペニスを焼け付くような快感の塊にしている。芯からカアツと熱く

なっている肉棒の根本からは、熱い衝動がドクンドクンと上ってきていた。

「うう……うはあっ……先っぽ、擦れる擦れるっ、気持ちいいっ！」

涼華は、後ろに突き出す尻たぶを上下にバウンドさせながら、背中を伸び上げさせてパイズリしている。そうやってペニスを下から上へすっかり搾り上げているので、裸の亀頭も満遍なく擦られていた。

カリ首も、亀頭の側面も、鈴口の周りの盛り上がりも、皮の繋ぎ目も、ローション塗れの乳肌に取り込まれて、竿と同じ風に刺激されている。

敏感な亀頭を擦られるのは特に気持ちいい。ローションたっぷりのヌメヌメ乳肌に強く搾り上げられると、思わず腰が浮き上がってしまう。ペニスの内部で快感電流が荒れ狂い、もっと扱って欲しいという浅ましい欲求を惹起させる。

「んんっ……んんっ……ぺろっ……ぺろぺろ……」

「お、オオオ、お前、涼華っ……そんなのどこで覚え　うああッ」

不意に、涼華は責め方を変えてきた。

ペニスの周囲に下乳を乗せ、砂糖袋並みの乳房の体重をかけながら、根本からカリの辺りまでを乳肌で包み込む。包んだ部分は、乳房を小刻みに揺すって磨きながら、飛び出た亀頭を舐めだした。

首を乗り出し、綺麗なピンク色をしている舌を下品に伸ばす。

快感でビクビク震える亀頭の表面を、涼華の舌が這い回る。

溢れ始めた先走り汁は、アイスクリームでも舐めるかのようにペロペロ舐める。舌体をべったりつけて亀頭の中腹を舐め歩き、丸く尖った舌先で皮の繋ぎ目をくすぐる。

「おおっ……オオオオオッ……気持ちい……ッ、堪んねエ、んあアア！」
又める乳房でカリ首をスリスリ擦られながらされると、亀頭が燃えている風に熱くなり、射精衝動が爆発しそうになる。栄はみつともなく息を荒らげながら、何度も腰をビクつかせた。

「こ、こついうこともアイツにしてやってるんだな？ そう、なんたる涼華……アア、本当に変わっちまったんだ……アイツに変えさせられたんだ……ううオオオッ……！」

気が強いものの真面目で清纯だった幼馴染みが、AV女優が使うような淫らな奉仕テクを身につけている事実は、栄を激しく揺さぶった。

セックスとは無縁そうだったというのに、一人前にパイズリを行い、パイズリフェラという高等技術まで見事にこなしている。

健気な面もある涼華のこと、好きになった男を悦ばせるために必死に覚えたのだろう。あの男がここまで仕込んだということも考えられる。

その両方というのも十分あり得る。

「ククッ……けどな」

今、涼華は自分のものなのだ。

あの男に向けられるべきいやらしい奉仕を、自分が独占している。

衝撃、嫉妬、優越感、自慰では決して味わえない、女とだけ分かちあえる快感。

胸中で様々な感情をせめぎ合わせる栄は、どうしようもなく興奮している。

ペニスの根本から這い上がり、充填されてきた牡の衝動は、もう爆発寸前だった。

涼華は風俗嬢のように何度も舐めとり、白く細い喉を鳴らしてくれているが、先走り汁は後から後から湧いてきて、枯れる気配がまったくくない。それどころか、透明だった汁は白い濁りを濃くしている。

「出すぞ涼華！ お前の顔にたっぷりかけて汚してやる！ 俺のザーメンでマーキングしてやるからな！」

涼華はそつと瞼を閉じた。精液が目に入らないための行動だろう。

奉仕の手は緩んでいない。それどころか、亀頭を舐め回す舌の動きも、乳肌で竿と力を扱く手つきも早く強くなっている。

乳房の正面を鷲掴みにした、涼華の細い指の間では、薄ピンク色の乳首がコチコチに勃起していた。山の頂上に突き立てられた旗のポールのようにピンとそそり立ち、上へ伸び上がる風にビクビク震えている。

「俺にパイズリして興奮したんだな涼華っ……このスケベ！ ビッチ！ あああ、でも興奮するッッ！ アアアア~~~~、ザーメン出るウウウッ！」

ドビュビュビュッッッ！ ビュ~~~~~！ ビュクククウウウー！

「うんんんん~~~~ ああ~~~~ アアア~~~~」



涼華がパイズリしながら昂ぶっているという事実にも強く激しく興奮した瞬間、肉棒をピーンと突っ張らせ、思い切り精液を吐き出した。

幼馴染みの端正な顔に、熱い濁液が次々に飛び散る。

汗ばんだ額を汚し、スツと通った鼻梁の横に着弾し、赤らんだ頬にべったり付く。

意識はないはずの涼華だが、重く粘り精液が顔に当たる度に、乳房と胸板に包み込まれる肉棒がドクンドクンと震える毎に、甘ったるい嬌声を発している。

精液をかけられ、胸の中でペニスに暴られる快感で、抑えられない声が出たという感じだった。

「はあっ……はあぁ………気持ちよかった………パイズリ、いやローションを使った涼華のパイズリフェラは最高だな………はあぁ」

ひとしきり射精し終えた栄は、興奮した息づかいで呟いた。

股間には、まだまだ疼きがこびりついている。

若い男の精力は、一度達したただけでは衰えない。加えて、普通では味わえないシチュエーションが、栄を大いに興奮させていた。

「んっ……おお………興奮していると思ったけど、オマンコぐしょ濡れじゃないか」

ふと見ると、肩幅に膝立ちになっていた太腿には、川のような愛液の流れができていた。

源泉である無毛の秘裂は、襖の隙間程度に綻んでおり、今も甘酸っぱい汁をコンコンと漏らし続けている。

「よし、次はオマンコさせてもらうか。涼華に筆おろし相手になってもらうか。知識だけは溜め込んでいる童貞は、涼華にベッドに仰向けになるよう命じた。

「反応が薄いのもそれなりに面白いけど、今度は普通に反応させてみよう……そうだが、こうしたら面白いんじゃないか？」

ひとりごちた栄は少し思案し、閃いたアイデアを実行に移す。

涼華と向き合う栄。

マシンの効果が持続している間は、使用者のいいなりである涼華の目をじっと見詰め、じつ命じる。

「いいか涼華。今から山野辺栄は、お前の恋人の一彦だ。その一彦はお前で童貞を捨てようとしている。わかったな？ わかったら、適切に振る舞うんだ」

涼華はコクリと頷いた。これまで見られなかった反応だった。

虚ろだった瞳に、ゆっくりと生気が蘇る。

普段と同じような感じだと思った時、栄は切り出した。

「涼華、俺が誰かわかるか？」

「え……なに言っているの……一彦さん……一彦、でしょ？」

はにかんだ風に涼華が答える。瞳は恋する乙女の光を放っていた。

（よし、命令が効いてるぞ）

「ああ。俺は涼華の恋人の一彦だ……俺、実は童貞なんだけど、涼華、俺の初めてを

もらつてくれるか？」

すると、涼華が困惑した風だった。首を傾げて難しい顔をする。

(何か失敗したか……?)

予想外の反応に緊張していると、涼華はおずおず口を開いた。

「あれ……私……一彦とは何度もセックスしていた気がするんだけど……処女も捧げ
たはずで……あれ？ ……気のせい、かしら……」

「あ……えと……あ……」

痛いところを突かれたと思いながら、栄は必死に頭を回転させる。

(そうだ！)

「なあ涼華……」

深刻な顔を作り、瞳をどんより曇らせて切り出す。

「ひよつとして、俺が嫌いなのか？ それって、遠回しな拒絶？ 俺とはセックスしたくないっていう意思表示？」

「え……ち、違う！ そんなつもりじゃ……」

「だったらいいだろ？ な？ 俺の童貞を受け取ってくれよ……」

捨てられた子犬になった心地で、すがりつく風に哀願する。

「ごめんなさい……ただ、ちょっと引かかったただけで他意はないのよ……でも、
ベッドの上で裸になってるのに、こんな態度をとられたら傷つくよ……本当にごめ

んなさい」

優しさに訴えかける作戦は、どうやら成功したらしい。

涼華は吹っ切れた風に、疑問を口にしなくなった。

栄を見る目も、心底すまなそうにしている。

(やり過ぎせはしたけれど……複雑だな……)

喫茶店で交際を知らされた時のことを思い出し、栄は一瞬陰鬱な気分になった。

目の前の涼華の様子は、栄が好ましいと思っていた頃の態度である。

あんな残酷な仕打ちなどするはずのなかった時の彼女の態度。

(……そんなことをこの場で考えてもしょうがない。今は、涼華とセックスすることの方が重要だ)

気を取り直した栄は、改めて涼華と見つめ合う。

「ありがとう涼華。それじゃ、いいかな」

「うん……きて、一彦」

一旦仰向けに寝そべった涼華は上体を起こした。太腿を大きく開くと、チヨキにした手を逆手にし、まだ背の低い肉敵をクパアと大きく広げる。

「ここよ。あなたのその逞しいオチンチンを、私のこのオマンコに入れて」

まるで母や姉のような、優しく導く声だった。そして、恥ずかしそうに頬を赤らめ、淫らな期待感で瞳を濡らしている。

開かれた淫唇から、トプツと蜜が溢れ出た。

大陰唇の奥の小陰唇も、開いた膣口の奥に見える肉ヒダの筒も、飴色に濡れそぼっており、やかましくヒクヒクしている。

「あ、ああ……それじゃ、いくぞ」

気の強い幼馴染みの、淫らで慈愛を孕んだ導き。

一度射精した肉棒は、初回よりも硬く大きく膨れ上がり、ビクンビクンと根本から震えている。

心臓をバクバクさせる栄は、大開きの太腿の間に尻を置いた。

ペニスの根本を掴むと、スネをつけながら膝で摺り足をして近づく。

そうして、膨らみきった亀頭の尖りを、開かれた肉孔に、ちよつとずつ接近させる。パシッ。

亀頭が触れるか触れないかという距離まで来た時、涼華は淫裂を開いていた手で肉竿を掴んだ。

「あれ……なんだかヌルヌルしてる……」

まだ残るローションのヌルつきに小首を傾げる。

「挿入しやすいようにローションを塗ったからな」

栄は適当に言い繕う。涼華は納得していない風だったが、すぐに表情を戻した。不審な態度を続けると、再び悲しい誤解をされてしまうかと恐れたのかも知れない。

「ああ、そうなの……………そんなの使わなくても、私のオマンコはいつでもヌルヌルなのに……………それじゃ、いい？ 童貞、もらっわね」

視線を絡ませてきた涼華に栄が頷くと、彼女はペニスを引っ張り始めた。壊れ物を扱うような丁寧さであり、それだけに経験の豊富さを感じる挙措だった。

グチュリ……………。

栄も息を合わせて摺り足をしていると、ほどなくして亀頭の先端が秘穴に入っていた。大陰唇と小陰唇を巻き込みながら、ジリジリと奥へ向かう。

「そう、そのまま腰を進めて……………ああ、すごい……………一彦のオチンチン、とっても熱くて……………んふっ……………ビクビクしてる……………」

手を離れた涼華は、両手を脇に投げ出し、上体もベッドに寝させた。首だけを起こし、仰向けになっても流れない双乳の向こう側で、肉棒が体内に埋め込まれていく様子を見詰めている。顔はトマトのように紅潮しており、呼吸は長く熱っぽい。

「涼華のオマンコもすごく熱いぞ……………ああ、狭くて気持ちいい……………これが女のオマンコの気持ちよさなんだな」

自慰では決して味わえない、女とのセックスだけで楽しめる快感だ。

ぴったり閉じていた膣をこじ開けていく征服感。

こじ開けたと言っても、ヌルヌルの肉ヒダは亀頭や肉棒の輪郭に沿って、ピタリと貼り付いてくる。

適度な重さが圧迫感となっていた。自分の手で握りしめるよりも強いかも知れないのに、包まれ心地はあくまでまろやか。ひたすら心地いい。パイズリとは違った味わいだ。パイズリと同じく何度も楽しみたくなる中毒性を孕んでいて、甲乙つけ難かった。

子宮口に亀頭を突き刺し、根本の肉で淫唇をぐにゅりと潰した頃には、ペニスは火が出そうな位に熱くなり、身も心も蕩けるような快樂の塊になっていた。

「はあ……あはあ……お、奥まで届いてる……一彦の童貞オチンチン、私の奥まで貫いちゃってる……！」

色っぽく睫を落とし、はあはあと息継ぎをしながら、涼華は感極まった風に呟く。

「ああっ、堪んねえッ……涼華動くぞ……」

「う、うんッ、きて、いっぱい、思う存分動いてえ、気持ちよくなってる……私のオマ

ンコで、気持ちよく童貞卒業式を終わらせて……はああんン！」

聞いたことのない切迫した声は、聞くだけでペニスが硬くなる媚声だった。

根本まで挿入した位で悦楽にわなないている幼馴染みの姿は、弥が上にも興奮させる。

「か、一彦のオチンチン、私の中で大きくなって……ンンッ……ああっ、お腹の方にグイグイくるウー！」

一段とペニスを反り返らせ、お腹側への圧迫を強めながら、栄はゆっくり腰を振り出す。

又チュ……ズズ……ズツチュツ……ズッ、ズッ……。

カリ首まで引き抜いては、子宮口を優しく突き上げる。

蜜を吐き出す肉ヒダを、硬いカリ首でジックリと研磨していく。

数分も繰り返していると馴染み始めた。青い血管を浮かせる太い肉幹。開いたカリから鈍く尖る亀頭の穂先。皮の繋ぎ目。ペニスの根本からてっぺんまで、至る所に吸い付いて、ヒダを擦る快感を大きくする。

「お、おおっ……………気持ちいいっ……………ああ、すげえッ……………!」

熱く又める膣に包まれるペニスは、芯まで灼熱感に包まれている。焼け付くような快感は余計なことを忘れさせ、ただただ抽送に駆り立てて、女壺にピストンする牡の悦びを高めていく。

「はああッ……………一彦の童貞チンポいいっ……………カリと中のヒダが擦れて堪らないッ……………はあッ、はああッ……………も、もっ少し激しくしていいから……………お、奥も、もっと強く突いていいからあッ……………んくう……………」

真っ白いベッドの上で身悶えしながら、涼華は甘ったるく言ってくる。

栄は奥を突きたいとは言っていないし、突きたい素振りも見せていない。許可と言うよりはおねだりだろう。

どうやら、子宮口を責められるのが好きらしい。

童貞相手に我を忘れるほど、焦れている風に見える。

まだ始めたばかりなのに、カリで引っ搔かれるだけでは満足できなくなったのか。そう判断した栄は、グツと腰を突き入れた。

「ひいああああああんっっっ〜！ お、奥っ、子宮口にニユブツてきた……
ああンンン！」

根本で潰した秘唇から、ドツと蜜がこぼれ出た。粘く熱い感触が下腹部に広がり、ふたりの股間が糸を引く。

子宮口を強く圧迫された膣は、ヒクヒクと淫らな痙攣を起こし、こみ上げる射精衝動で突っ張り気味の肉棒を気持ちよく刺激した。

「ち、膣がどんどん締まって……クウツツ……どうだ涼華、童貞チンポに奥を突かれて気持ちいいかッ」

最奥を小刻みに突きながら、栄は叫ぶ風に尋ねる。

「気持ちいいッ！ 気持ちよすぎるッ！ 頭の中が真っ白になって……あああ、オマン

コ、いいッ、ああっ、あッ、ああッ、堪んない、もっと突いて！ ドスドス突いてエエ！」

突けば突くほどペニスを気持ちよく締め上げてくる。

もっとこの快感が欲しくて、他の男のものになった幼馴染みを乱れさせたくて、栄は抽送を激しくしていく。

シートでガクガク震えていた太腿の付け根をガツシリ掴み、密着度合いを高めた。

ペニスを根本まで納めた状態で、背中をしならせながら、何度も何度も責め立てる。

「も、もっと奥うッ、一彦の童貞チンポでもっと奥を突いてえ〜〜〜！」

潤んだ瞳で浅ましくおねだりしてきた涼華に応え、彼女の左足を抱え上げる。太腿の裏

を胸板に密着させ、股間を押しほど挿入を深くし、膣奥を責める。

亀頭の先端が子宮口に又チヨ又チヨ嵌まり込む度、ビクビク振幅する膣は身を締め、涼華の切迫した嬌声が迸る。

「童貞チンポ相手に、くっ、そんなによがって恥ずかしくないのか……っ」

「だって、だってスゴいんだもん！ ああ、はああ、ンンッ……ぐうウウウンン！ ど、童貞チンポいいッ、一彦の童貞チンポ最高オ！」

すっかりペニス狂いになっている。

(気の強い真面目っ娘だった分、セックスに嵌まると際限なく乱れるのかも知れないな) ショートポニーテールの金髪を振り乱し、両手をバタバタ暴れさせている幼馴染みを眺めながらふと思う榮。

突く度に、フルンフルンと上下に流動する乳房の様子も、ピンと起立して宙空にピンク色の縦線を描いている乳首の具合も、昔から知る幼馴染みのまったく知らない姿である。

一彦はこの光景を頻繁に見ているのだろう。

これまでのことを考えるに、そもそも彼が涼華を仕込み、淫らにしたのだと思っ。

惚れた女の常で、涼華も性技の習得に積極的だったかも知れないが。

涼華に対し、男女の感情を強く抱いていたわけではないものの、そう意識するとやはり嫉妬を覚えた。

だが今、その涼華は自分のもの。

催眠術のようなもので操ってはいるが、見た目も抱き心地もこの上ないカラダを抱いているのは、他の誰でもない自分である。

他の男に仕込まれた幼馴染みをつまみ食いし、自分に夢中にさせている状況は、牡の優越感を感じさせ、快感を深く大きくしていた。

「出すぞ涼華！ 童貞チンポのザーメンを、お前の奥でたっぷり出すぞ！」

「はああんんッ！ 出してえ、いっぱい出してッ！ 童貞チンポの初中出しザーメンっ
つつ~~~~、私の中に、ドビュドビュして~~~~！」

膣内を穢すと宣言しても、栄を恋人と誤認している女は嫌がらない。

それどころか、膣内射精をおねだりしている。

ペニスの内部で滾る射精衝動は爆発寸前だった。

腰を振る毎に意識が途切れ途切れになり、下半身は甘い痺れで満たされる。

ビククク……………ビクンビクンビクンッ……………。

肉ヒダの心地よさそうな引きつりも、激しくなる一方だった。

白い裸身はピンク色に染まり、染み一つない美肌には細かい汗が浮いていた。

膣の締め付けは入り口の方が格段に強くなり、代わりに奥が緩んでいる。

涼華も達しようとしているらしい。

「涼華のマンコに童貞ザーメンを出すぞッ！ あああ、出るぞ涼華、オオオ……………ウオオオオオオオ！」

緩み始めてきた奥ヒダを追いかけるように、カリ首がググツと広がり、再度ピツタリ密着した。はちきれんばかりに膨れ上がった亀頭の穂先は、子宮を揺さぶる勢いで子宮口に又ツチヨリ嵌まり込む。

「あひいッ！ あああンッ、ああッ、あッ、あッ、あッ、イクッ、童貞チンポでイクッ、子宮口に中出しされてイっちゃうッ！ ああああ、イクウ~~~~~！」

「ビュビュビュ~~~~~！ ビュクウ~~~~~！

子宮口と密着した亀頭から、夥しい量の精液が滲み出す。

二回目の射精というのに、熱さも粘度も一発目に劣らず、それどころか増している感さえあり、

「~~~~~ッッッ！ んひいッ~~~~~！ 出てるウ！ 童貞ザーメンどぶって

る~~~~~ンンン！」

涼華の顔は、茹で蛸のように真っ赤だった。

裏返るほど顎が跳ね上がり、細い喉が丸出しになっている。

切れ長の目をカツと見開かせ、投げ出した手でシーツをギュツと握りながら、総身をビクビク痙攣させ、頭の悪い台詞を絶叫していた。それも、あの男に仕込まれたのか。

頭の中が真っ白になる甘美な射精感を味わいながら、他の男の好みに染められた幼馴染みに、栄は何度も射精する。

「アンッ~~~~~あふンッ~~~~~あああ~~~~~童貞チンポに中出しされて~~~~~はああ~~~~~イか

されちゃった……………はふう……………」

精液をしぶかせながら引き抜くと、栄の肉棒の幅に広がった秘裂から、白濁液の塊がコボリと出てきた。

「うんん……………ああ……………すごい……………こんなに濃い……………」

「涼華……………俺との……………俺の童貞チンポとのセックスよかったか？」

「う……………うん……………イカされちゃったし……………すっごくよかった……………」

仰向けのままでセックスの余韻に浸る涼華に尋ねると、彼女は見たことのない満足顔でにっこり微笑むのだった。

**この体験版はここまでとなります。続きは製品版でお楽しみ下さいませ。
ご鑑賞いただき誠にありがとうございます。**



「ご挨拶」

この度は、ご購入くださいますして誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。
この他に違いはございません。

一部の体験版は分量が製品版の半分です。

「ご注意ください」

- ・ P D F 閲覧ソフト（Adobe Reader 7 と 9 と で確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・ 本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）と、
「セックスライフ」（G・J?様）
を利用して作成しました。
尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

「ご意見、ご感想をいただけましたら幸いです」

（2012年9月末日現在）

- ・ 夜山の休憩所のブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>
- ・ 夜山の休憩所のBlog <http://b.dlsite.net/RG11385/>
- ・ ツイッター <http://twitter.com/kimoriyamasuido>
- ・ eメールアドレス kimoriyamasuidou@gmail.com

木森山水道（夜山の休憩所）